

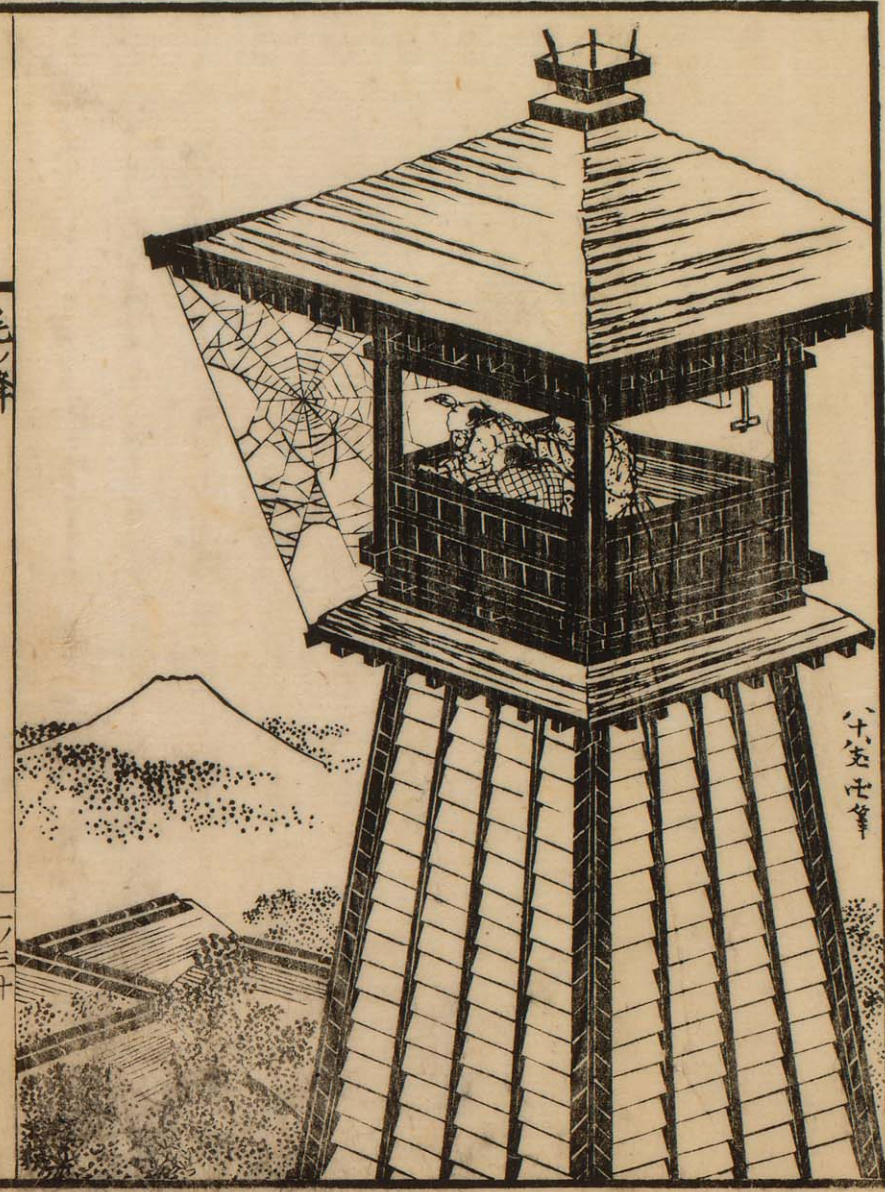
毛の降る事

吉へると毛の降る事... 和漢の書り見ゆき  
と心降る事... 思ひ居... 天保七年申六月  
十九日の朝日侍り市谷蓮池とありまると高介  
り... 毛のぬりあふ... 事... け... 下... 居  
... 拾ひ奉り... 忍人... 奇合... 見居  
あふ... 供の者... 見... 二寸斗... 白... 毛  
... 云... 大の... 根... 拾ひ... 又... 雨... 露  
... 少... 無り... 居... 専... 判... 仕... 出... 夕... 方... 合... 相... 板  
... 色... と... ぬ... り... 寄... 不... 曲... り... 角... の... 取... っ... 六... 七... 毛  
拾ひ... 又... 市... 谷... 御... 宿... 内... 或... 人... の... 吐... け... 松... 山... と... 云... 而... 下... り

毛ノ降

一ノ二十九

法性寺... 谷へり... 雨... 少... の... 廣... 場... の... 毛... 下... り... なる... と  
澤山... 雨... 居... 中... 六... 寸... 斗... の... 長... 毛... と... 有...  
... 拾ひ... 方... 宅... 一... 坪... 雅... 子... 毛... と... 達... り  
... 毛... と... 色... 色... 後... 連... 隣... 毛... 拾ひ... 居...  
... 子... 雨... 故... の... 廣... 場... 一... 町... 毛... 拾ひ... 居...  
... 毛... 拾ひ... 七... 八... 寸... 位... 尺... 斗... の... 長... 毛... と... 四... 六... 筋  
... 拾ひ... 束... 一... 丈... 毛... 拾ひ... 居... 合... 毛... 拾ひ... 居... 風... の... 吹  
... 所... 毛... 拾ひ... 降... 雨... 或... 人... の... 云... 一... 八... 日... の... 七... 寸... 斗...  
... 臺... 毛... の... 毛... 拾ひ... 居... 云... 一... 丈... 毛... 拾ひ... 居... 思... 居  
... 居... 一... 尺... 斗... 一... 丈... 毛... 拾ひ... 居... 一... 八... 日... の... 夜... の... 毛  
... 拾ひ... 居... 一... 尺... 斗... 一... 丈... 毛... 拾ひ... 居... 一... 八... 日... の... 夜... の... 毛



毛ノ降

人毎り得探るる二毛或八十毛共毛は落るる  
 ぬきに三日が回ハ霧を付く見道を澤山り  
 落る居る所も有は事を能考りて速に降  
 るか根うと思も多うり毛色ハ白毛多く兼  
 毛色有又黒毛と黒白相つぬふと白黒毛の  
 更りぬかも多う長さハ二寸位あが多う三寸位  
 ぬか毛は河の中よハ五六寸と有く七八寸ハ  
 尺二尺三尺七八寸又二尺たりぬか毛有り竹の  
 毛も更り毎一粒一粒人の断りハ天明年候  
 山の焼か前うもはぬりの毛降りたりと云り毛ハ  
 山の焼くぬかの焼毛の降るかぬべりといひが  
 如何も不審之候今度降ぬか毛の強弱候の

幸と申し出し何れも云獅子のどきと極歎屋室ゆ  
 戦うてまの或は外國を降とふのどきと云そ外博  
 家の弄流孫海を少のどきと云そと河を  
 ぶら狂の候とゆ又如何成故と云幸ハ更よむ  
 松山と云雨り候ふ小林某の門口に平が拾るハ  
 一撮をとり扱たるゆと毛少く産毛のどきと根  
 えの毛込付居りり脱投とく勝へ重と云と  
 後の人の現り毛を見と云と落とる毛ハハ  
 まど大の毛馬の毛あどいろと云落と居るの板  
 具と云後の人ハ珠と云思入べと去り  
 実と云降りりとの幸ハ時意と云と拾ひ

毛ノ降

人の毛を奪へと皆一毛はてあくに成居  
 きふり花のゆ一撮をのまう拾ひ居るの弄中  
 の弄ゆりとも感あり甲別のま状ハ  
 六月の末り白毛降ハ四寸あり三寸よるびるも  
 何り何とも夜明け程と毛と云とまの満國の  
 幸と尋ふり五畿内ハ東國ハ悉くゆりり又  
 あとと降と云幸ハ何り安と云と漢別ハ落  
 ぬと安と云余ハ何國と云とハ地安行と云  
 降更別岩城平ハ六月の廿八九日ゆりゆり名吉屋ハ  
 七月の八日七ツ時より翌朝と云り降と云と二三  
 の間ハゆりりとも間ハ遠く毛と拾ひゆりと安

皆毛ハ因ト幸ハグウ甲別ハ白多ク右左各ハ葉ト  
黒多ク白ハ少トノ事也其トモ無ヘグウト事ト  
降ルカ日ノ東西前後ハト又ツウト事ハ  
和漢合運リ慶長九年京師畿内関東諸國降毛長  
四五寸同三年六月四日降毛長四五寸  
又或記リ寛保三年七月十六日夜毛降  
安永六年二月伊勢尾張色毛降之ハ以テ唐首也  
昇ルトモ見テリ

天明也余因ハ志トド江戸ハ毛梅リト云レテ遠  
所古ト人ハウチリテリト時降ル毛あり  
精々洋ハ筆記ト見モ跡リ多ク唯南條

毛ノ降

一ノ三十二

北意頭談リ記ハ云ク妻トクク記トモ  
りたより今全文とたり記ト  
水意頭談ノ卷ニ寛政五年七月廿日江戸雨降テ  
毛ト多ク梅トセリ九月廿八日列々多ク  
一ト我多クハ色向ク長サ六寸跡リ長サハ  
一尺二三寸とリ色赤トモたま〜河リ〜毛  
京トモ親トモ人ト拾ハ九一毛ト送り哉  
勢ガ馬ノ尾ノ端トモ毛ハ河リ江戶中に驚ク  
降リ〜幸何孰ノ毛ハ〜幾万疋ノ毛ありや  
〜本藩ノ幸ハ〜今年ノ毛色ハ時ノ  
毛〜今〜日ト幸ハ〜又次リ出シ〜隋ノ時リ  
降ルカモ因ト見ル

漢書り天漢九年三月天雨白毛三年八月天雨白  
毛 蒼者毛之強曲者也

又晉書り泰始八年五月蜀地兩白毛

又隋書り開皇六年七月京師兩毛如髮尾長者三尺

餘短者六七寸 是年關中米粟貴

相伝天保乃申年ハ蘇敷出来とて長徳隆よ及び  
きり文明の頃と各州の飢饉と有る右隋の  
開皇年々々々回振ると偶中せしもの外漢去  
少も性々有と安南邦とてもなる有奉たるん  
漢見故ある事乃之何とせよ不思議なる事  
有り依り予現見安なる浪りと要安化一並ぬ  
白蛇靈異と云々たる事

白蛇

一ノ三十三

市谷自證院常編阿闍梨乃比敷山西谷佛宗院り  
任職の時文化八年辛未六月廿八日之勅寺谷乃十女院へ  
約まてよふハ返付は谷の赤々天へ白蛇と持来ふ  
善之令誓とせし居り此の蛇と見ると約まての事  
ゆ念志をいせし居り此の蛇と見ると約まての事  
長三四尺たり有りたさきと支り准り文ハ白文に  
少くあり書と合と崩文とあびる相とる  
ハ光澤有る眼ハ紅なり蛇の頭ハ一目  
見ると誰とぞの心持有る行とて思  
帰らげう。蛇たる有り白蛇は浪り顔  
優劣にげう。蛇り。この國がは白蛇と  
回振ると行くと優劣出懸帰るとそのり

育うりのりぬは白地り付ハまず尋テ美成由来  
り元は地ハ京ノ山原ニシテ河原ノ夕原ニり  
見世持りもるトシ紀伊野浦ノ金十両めり  
洞へ来り一地なり物のよは地不思淡成奉ハ疾ニ  
疾ニ重ク言フけ程のさまよなまり是ハ心成ぬ  
奉ト不審をせ一ち四月廿二日巳の己ハ彼白地と  
入金色ニ一箱ノ洪洞ハ僅リ小指と也り葉の根と  
卵ノよ指物ニ迹失り山原ニ驚ク發スて是  
迹色ハ跡ノままう尋ズもも出ズ也ハ  
尋ズもも方便と也一ち尋ズもも尋ズもも  
ト者ハ人まず活クひらけルよとのうちに勝ル  
尋ズもも判別ハ是ハ迹を尋ズももハ行ハ

白地

一三十四

系消うくとたせ一の形るべ方南ハ良ノ方よ  
苗也バ敷山ノ五初寺谷ノ森天明一来りする  
ちうんりゆて活ク天ハ社チ也ニ靈辰新ク竹所もも今も  
急夜ゆりよお遠を一ついが果一一つ云葉ノ  
ゆく回伏八日の日之賣りゆり一河ノまり元の乾ハ  
入唐ノ海り唐り一一と之交り於一彼山原ノも  
靈妙ノ量り類と奉と思也又前ノト者よらを  
けかりト者ノまいの元と神靈自在と也る  
そのゆ今の世り南一大切玉極ノ金一のく  
求めらしまる奉ゆ念中一下一迹去る奉ハ致ス  
まぬり去つぐ家業をま一新乃一  
靈物と心一見んをのり驟キハ思ハる一と也ト

恒令今日前より千金の換ハ有と云又支那ハ余事よそ  
利徳と授け守り即にお遠行とすまうと云わくは  
蛇ハ何ぞやへ成とを祀ちやるか方より一ゆんとかせ  
ゆ名元儀史よ二変しとて毎天へ納め夜とのと云動寺  
まじりて延座しくは廿八日ハ己乃白なきバとて驚く  
はと来る者も成居るものとは是二靈天なるやと  
阿闍梨の具り得るまじり

己乃己の日と己侍とて毎天の嫁日と云事と  
女童と知事よりまて妻の白と嫁日之別  
四月の己の日十月の妻の日ハ因縁深き日と思ふ  
五月の己の日十月の妻の日故なり仙家よてハ  
己と妻ハ天衣根元正対化靈の日とて同一日の見

白地

一ノ三十五

俗に是と七月と云江の端乃每女天ハ

欽明天皇乃御宇六年己丑四月の己の日より神  
出現より多ひく社と為よ建て後今も到るまで

四月の己乃日十月の妻の日に系奉りハあま  
嫁日の妙合ハを以捨まじり事ハ勿論あるを

大辨女天秘決ハ己乃日妻の日と云く嫁日と云る人育見給経に出たり依用  
聖雲寺の國委系別の文徳をり依用ハ秘決ハ己乃日妻と云く嫁日と云る人育見給経に出たり依用  
の秘り解澤者と云ふハ何れも其決ハ二の巻矣女天來りと云く後ハ縁日  
妻と正対化靈の目よして嫁日之是ハ元神仙家の秘密盡云の信と云法本解  
書先達より神神傳一系より多秘奉事

又曰濱別宮松の城下吉祥園院 仁和寺の院裏の庭前へ

文政乃秘決と出さか白蛇ハ白眼と有まじりと  
又合ハをより雷白りくハ白くか一為嵐文と

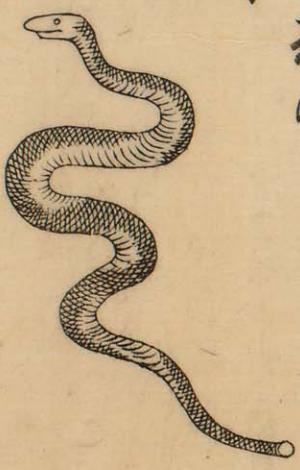
おびきり物行よと電ら委物よ〜近〜より能  
 見〜と一向驚うぞすお母のそのま〜若いおも  
 出さ〜と〜とをのりには戸本和折鳴妙見の松の樹よ  
 放〜とふ大白蛇ハ危人見〜とあり居〜と〜と  
 指よ〜と居る故白眼赤眼と見〜と〜と舌の松よ  
 知〜と〜とけ蛇天保乃中比ふこの〜と更は形と  
 形ハ〜と〜とけ物行〜と〜とや主後弘化年  
 中に又餘程大故白蛇とけ松よ放〜と〜と  
 ま〜と見〜と

天保年中武別豊清於戸田川乃側形の浮間村まで捕へ  
 たり〜と白蛇と名田乃長天と祭り〜と庵室は辰  
 て諸人よ見せ〜とこの蛇二尺六寸餘りと首は〜と

白蛇

白蛇よ〜と斗鷹桑葉の曇々と帯〜と若い出〜と温  
 順〜と〜と電ら委との形〜と蛇の尾の尖〜と  
 小豆粒程の全〜と舍利玉乃色〜と成〜と角〜と  
 平形の本〜とけ蛇天保十年已〜と後〜と  
 白蛇と煙色ぬ〜と吹あ〜とけ度ハ餘程高帯と  
 帯〜と〜と白蛇とほ〜と居〜と見〜と

右浮間村〜と捕〜と蛇ハ斯の〜と  
 尾〜と玉河り〜と形棘令  
 常の蛇〜と〜と世常の  
 蛇〜と〜と蛇の  
 蛇〜と〜と温〜と





毫ら安そののり月ハ薄赤うり〜と云々えうり

又云南赤永二年己巳月浅茶南坂河東在決五節と云

その夢の告と云武州是之記突斯が原う〜記あり

〜と云此地元下総の國千葉縣初撰天又は後久居り〜平場宿場

白地と見入りた〜而ハ田文淺程のり〜と云

写人餘り〜と云〜秀藤のり雪白と云

〜と云〜ハた〜少〜英と〜と云〜艶有て元との

相殺のゆ〜と云〜尾先よ小豆粒程の玉有縁を

中〜と云ハ凡の實のゆ〜けのゆ〜とのり

〜中〜下ハ田角よ〜此の〜〜芥菴の

ゆ〜との月ハ黒眼う〜と云吉と遊近ハ出せと云

不嘗味成との〜と云〜前〜記〜と云〜浮る村

白地

一ノ三十七

ゆ〜と云捕ゆの地〜と云〜根あるとのゆ〜と云〜と云

又〜秀藤のり

靴乃行列英鮮と行〜と云

附火と焼と事

下男吉松が流りけ〜と云〜渠が在而〜と云〜家又抱〜と云

馬方り決と云者〜と云〜疾の引明〜と云〜馬と牽〜と云

〜と云〜に直〜と云〜村難〜と云〜菽法〜と云〜靴〜と云〜此〜と云〜此〜と云〜尾

〜と云〜居〜と云〜敷〜と云〜と云〜色〜と云〜驚〜と云〜迹〜と云〜共〜と云〜り〜決〜と云

〜と云〜更〜と云〜り〜遠方〜と云〜馬〜と云〜牽〜と云〜行〜と云〜心〜と云

〜と云〜細道〜と云〜と云〜所〜と云〜あり〜と云〜大谷〜と云〜通〜と云〜り〜多〜と云〜よ〜と云〜行〜と云〜と云

〜と云〜久〜と云〜愛斤〜と云〜号〜と云〜居〜と云〜〜と云〜通〜と云〜行〜と云〜と云〜と云〜馬〜と云〜と云〜牽〜と云〜行〜と云〜又〜と云

〜と云〜通〜と云〜り〜人〜と云〜有〜と云〜〜と云〜通〜と云〜路〜と云〜成〜と云〜兼〜と云〜侍〜と云〜間〜と云〜り〜繞〜と云〜二〜と云〜里〜と云〜程〜と云

〜と云〜通〜と云〜り〜人〜と云〜有〜と云〜〜と云〜通〜と云〜路〜と云〜成〜と云〜兼〜と云〜侍〜と云〜間〜と云〜り〜繞〜と云〜二〜と云〜里〜と云〜程〜と云

道と二時をさうり柳りし潮へ家へ降りたりけ日  
吉松と回し方へ馬と牽く行か普合前り先方  
めく安合とるよ法よりハ二里程遠きく海へべ  
との奉故を様りたりし法が坪りし回とあき成  
吉松とゆりきまきバ竹し新をまき海りしと  
回しり今宵ハまきく引つと大石は行かき  
大石は道よも回しりしと言ふ吉松云我中と回し  
道とまきしに竹よとをまき行たりしむけたるの  
ちりといへバワヤなはれど西安本に柳りしと  
敷く馬らまきたりといふまハ靴のまきよく化しと  
さかろちりといふ皆く知ひし何んかま成よ  
森りしに回とゆり入口ととんくと叩く者首

飛行列

誰ぞと回し中津屋の暮りたり客之人首今より  
園の方へ行く客成が少井の荷と解く馬よまき  
初夜との奉一人番らぬると云よるまき初とまき  
只一人と回し三人入用とまき武人の馬ハ地を去  
まき今一処まきまきまきまきまきまきまき  
初と回しり脚の馬と三の馬たりと言へかしと  
早く来るべしとまき中津屋の者ハ坪りぬ  
の應對なり末る法と馬よ飼と想けかのもまき  
めく食まきと馬と牽りし先脚の西へ法ひ  
初きりし一向知ぬりし五番成まき思ひ連り  
中津屋へゆきし見るに森り居る之記しとまき  
ゆ志あるといふ我方は今宵ハ客まき人まき

とまを明朝比るるは草へ初巻也門遠ひきくと  
りまを之の方へと移り尋らに竹奉と知ぬと云  
々の故能く考へ思ひ出〜〜〜は今於此に石歩  
あふ故なりと漸心附く是を此の業あると略く  
知り憎む事とハ思へども詮方と成り大なる懸  
まを申ゆと吉松語りきりきり〜〜〜蓋ハ正愛人の  
言若〜〜〜の云ひ〜〜〜同り人の色りハハハ人  
とを此の少〜〜〜當調声〜〜〜吾の短と人の言若に似る  
そのよ此度の跡〜〜〜考り〜〜〜ハ前の声と當調声と  
其時ハ幕内中の者皆く喧居り此奉〜〜〜心愛言と  
云ゆりお遠ハ此度形〜〜〜中〜〜〜又外ハ此の化ると  
怪に見〜〜〜やと同り夜ハ大行列乃既入と意する

旅行列

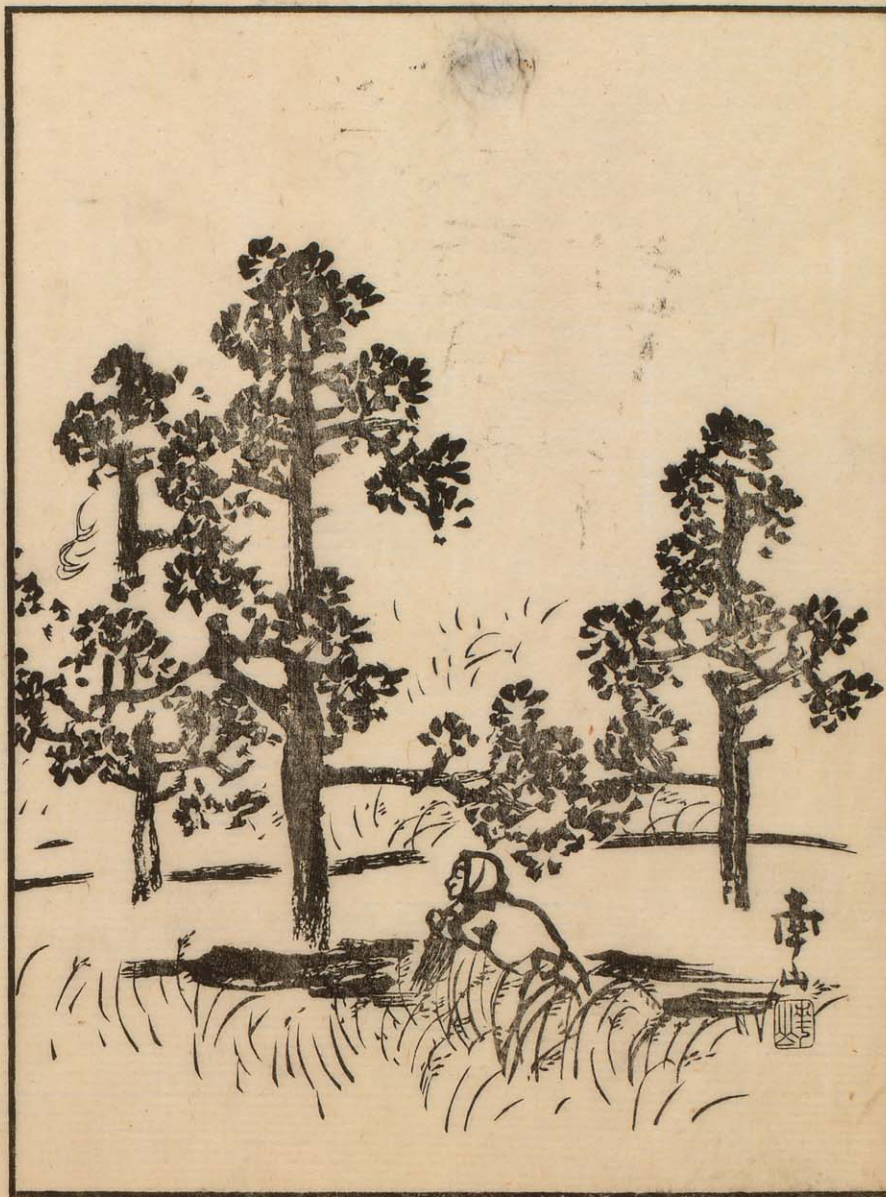
奉〜〜〜大名乃行列り意中ハ是を跡〜〜〜能考ゆハハ  
此〜〜〜此度の主澤ハ田舎ハ一筋道より〜〜〜ハ夜乃  
中ハ此跡や先ハ村へ歸る者〜〜〜此度ゆり外ハ意する  
そのハ一人と此度形〜〜〜のこ人御道色り〜〜〜ハ  
是より〜〜〜大名乃既行ハ形〜〜〜若と既行乃〜〜〜成る  
半月と前〜〜〜と先觸此度ゆ〜〜〜馬と奉極のそのハ  
驚〜〜〜存まり居り奉〜〜〜此度ゆ〜〜〜ハ〜〜〜既入ハ  
後中り〜〜〜有〜〜〜顔ハ此〜〜〜懸ハ人〜〜〜のともハ  
〜〜〜怪ハ見届〜〜〜る〜〜〜同ハ顔と懸〜〜〜人〜〜〜竹も  
少〜〜〜と替り〜〜〜る奉ハ形〜〜〜ハ〜〜〜声ハ竹〜〜〜と喘  
調声ハ此度の一筋ハ大既入〜〜〜ハ大名故心既居〜〜〜手端  
〜〜〜ハ珠乃行列〜〜〜ハ馬と傍へ引込居〜〜〜也〜〜〜

きしる車跡念の燈のこけは後逢ひくへん気早  
だまさらし車ゆへに燈のこけを行列の先を燈  
駕籠長柄合羽籠にのりまき実乃大夜も替る  
車は燈のこけに燈のこけは志津野村色ゆへに能  
宵事故さしる環車車も思ひさか松子ゆへに  
養濃瓶をぐえ車者さしる人の妻と成り子と生え  
瓶車乃燈の出来し車ゆへに車ゆへに燈のこけは  
乃ゆへに餘國り晴きさしる弁慶とゆへに平八松倉  
の地ゆへに燈のこけは是木の車ゆへに兼へり  
又瓶の火と燈を車ゆへに元人の知車ゆへに何成樹を  
燈をさしる知り居るやと向りさしる馬ゆへに骨を  
唾へし燈をさしる夜ゆへに燈のこけは成車ゆへに誰も

瓶行列

存りきむの小瓶のこけは燈のこけは多し燈を車ゆへに  
何故と燈をさしる分りやさしるゆへに燈のこけは  
燈ゆへに人採りさしる目念の車ゆへに存りゆへに或疾  
車ゆへに目も垂べ眼を燈ゆへに向りさしるゆへに  
思ひゆへに燈のこけは道ゆへにた遠なりゆへに何成のこけ  
燈ゆへに車ゆへに見ゆへにさしるゆへに存りゆへに燈  
小雨ゆへに燈のこけは傘ゆへに道ゆへにゆへに燈のこけは  
ゆへに燈のこけは燈のこけは燈のこけは燈のこけは  
連綿ゆへに車ゆへに燈のこけは燈のこけは燈のこけは  
大汁り燈のこけは自燈ゆへにゆへに十汁を行ゆへに  
取めゆへに声と燈ゆへに大声ゆへにヤイとゆへに道ゆへに  
出かゆへに瓶を思ひゆへにゆへに燈のこけは燈のこけは

是元あしもとりく唯ただ一声ひとこゑワイと声こゑと浪うなりよ鳴なく殺ころす乃の火ひ  
一度いちどは消く失へく疎あはい美いの晴はり成なり餘あまりの是元あしもとりく  
嗚なが一ひと不ふ懸けん命いのちめく声こゑの浪うなり鳴なり敵たか私わたしも淋さびしき  
ゆく連つらよ命いのちめく一ひと二ふたつめくおよおひくやと  
竹たけとありやささむら文ぶんの馬うまの骨ほねや者ものと近きん色しきと探さぐり  
見みるに竹たけともにあふのちけまを更さら切きりよハ止とどめ  
響ひびく毛けへ帰かへり燈とう灯とうと燈とう一ひと畑はたけ中なかの近きん道みちとくけ初はじめ  
能よ見みるに竹たけと形かたちを敵たか方かたなぐく帰かへり来きりゆり  
す下したふ二ふた丁ぢやう餘あまり脇わきの方かた家いえ居ゐる垂たび心こゝろ産うむる座まの座ま  
道みち路ぢま丁ぢやう餘あまり乃の下したよ馬うまの骨ほね卒すつと百ひゃくと打うち捨すて足あし  
ささバ命いのち一ひと泣なり泣なり是元あしもとりく嗚なく火ひと燈とうと本ほんと  
思おもひよ下したの然しかりもと必かならず何なん成なり本ほんよは下したと骨ほねと



唾へ赤りく捨ちりて合点行りさむそ英け骨の首振  
ろくハ敷十丈奇合焼一初幸と見くりハ馬の骨も  
あろ松より多く迎色よハ口産行りハ竹所ハ丸来り  
ゆらう其も合点の行りさぬそのよハ産れと流り  
は若松ハ洲母の懐と難る比ハ馬好うと幸赤行て  
末ぞ若さそや門の色と性根うと居りて酒順よ  
く勇氣も有さうと落付居く竹幸と能見露め  
う貴く居る故色く住成採交活と安くと養記  
くとも取ると記一重とり

靴大の幸ハ鈴木牧之がハ靴雷溝り云靴の火とるを  
説ハさまぐ河とど皆信どがく一日が目赤と視ハ  
或夜深更り二階の窓の浮り大の映ると懐く

其の隙間より現るるまじきハ杭雪の掻揚のよまを  
 により火と出せ能くれば此島の燃のこま態により  
 がより焼く事寒火のどくおりうま色バ焼く  
 現る居りうが火と出せ時と出さる時河り  
 うまが肚中の氣よ急むるゆらんまが氣急常  
 火とうまがるハ勿論ゆり石身が雲根志ハ杭のまの  
 たる事と云が杭火まむのひりかまを河ばか  
 物のま云物のまると常より杭火ハ別なるべ  
 と云く又秦昇の二骨活うま或人物火と足付て稽  
 原より暖道と遠行ハ杭ハ人あるべくハまばて  
 大小二十丈葦根の廣前より廻つ廻るるまと限  
 りより敷色居り近くより能くま火とるま

杭行列

一ノ四十三

そのハ渠がまこロヨウと飛よる時口中よりフツト息火  
 出づま息火のどくとうくと光ハ火極より二三尺前  
 うまを光るハ光を燒けま光る事ハ勢よまロヨウト  
 物ま時ゆりま遠方よりま色バ明滅以候  
 まると理りゆりま有まハ皆西委記ハ振新ハ  
 あら元末吐息まま事ハ能くま事ま去らう  
 又我固うまと云信ハ馬の骨うま焼くま事義徳  
 うまを信り事ハ同法ゆり又回ハ義徳の肉うまも  
 苗本もろ去信ハ馬の肉うまと焼くまと云信り  
 うま馬ハ馬の交流うまま又予か知るハ房州館山産の  
 藩中も梨行某のま亡父ハ焼炮と好く山樞ま  
 たりうまが或杖の夜回小面ハ信居るま杭火と焼く



阪へ小倉の方へあるま例へ引舟へお九下と侍唐  
 肉り遊は枕ハ竹公の小倉の下まぐある故決絶と  
 元連〜お〜思入の枕を敷と知〜やワイと声  
 叫び〜御共〜聖朝を呼び〜あり馬の骨一ツ骨  
 まり是令〜彼が作天〜元唐〜約〜あるんを  
 毛を云信の云色り枕大ハ馬の骨〜焼〜云と  
 慮〜ハちり〜この事〜色ホとん若りよ是と  
 骨と凡と色〜の焼〜この者〜量り〜  
 人の金と標多〜雲よせぬ教さ〜奉  
 附虫ぶ〜ひの奉

伊勢の國河の津の南の方よ雲津と云鳥河り或  
 真家のも代供人き人石連主人の代来り

螢責

一四十四

太神宮のち〜神樂よ定〜は市に看り〜る夜  
 神樂料の金子數十両有者〜る悉造〜るもぬん  
 大〜警〜新も〜とせん〜たり〜供男よひ〜るハ  
 我ホう板の始末お来〜ふ〜ハ再主家〜ハ帰〜るも  
 現世〜〜色〜覚〜〜させぬ〜作〜るも  
 前世の看業のちも〜思入り〜は〜ハ神佛〜  
 多信の〜板成横難消滅と形〜〜覚悟と  
 極あり〜ハ如何〜〜國件〜ハ〜は事〜  
 是〜我ホと外り〜の形も〜は〜  
 修行者〜成人〜の月と〜如何板〜と露余と  
 頃おち〜六〇年月〜又雲津若〜と〜るハの心前

病りて盗の意ハハは家へ思ひて能く見たり  
王家の音は響りて三流の音は響りて跡の外宮の  
跡りて余り松子と響り居るかまゝ近きと  
妻友母の受けはあまの先世と金と拾ひと  
し事うとて史より何の松りよき身代り成り  
後らあてまびの響りてまびの響りて六年  
前乃陰悪とてり因せまは近きものもの  
事とそと先く知り弾く響りてや  
御より是の事うるが如行成事りやぶまより  
ありまを毎夜響りて王家へ集り次第り  
救増く西月り込入故年主ハ救面代物とせの  
月り入る居るよいつく救を中うとて二面り

螢責

螢生く〜真言此甚なり堪業〜が遂には家  
の身主七日目り螢の毒りあり〜物ハ死り  
死すり〜是ハ寛政の末つ方の事う〜我ホ  
其頃ハ伊勢の津り居る危りり沙汰〜現り  
支知〜事う〜跡り三別之佐久の崎の茂平と  
りよそのま次津り暮〜あり〜うハは螢の集  
り〜ふと目〜あふと連り〜事入り〜事込り  
松源寺の先方丈の世形りま〜人の霊のおよ  
〜〜〜離とのと事跡〜〜近〜は  
四谷りお若〜と云ぬ女育〜前〜成丈〜業り〜ふ  
ま〜彼丈と長持〜〜減りに長持の中〜と  
崩生〜との事ハ四谷法法〜〜歌聲〜

うと仰り量家々人旅志ふ事う〜塵り河  
 ざうわお〜ハニ井寺の頼家河間紫嵐と成  
 敵山の経巻と噴荒〜ふ〜あ〜と河の衆と  
 りの旅巻をの身主實備の故主靈堂や  
 仰り〜若〜め遊り死よ即りきりう出於  
 思はぎふ勇人武人よと甚愛備の思り〜の  
 ま〜交〜目前の理〜ハ量り難〜  
 予〜後天保九年伊勢路通行の時の螢の事を  
 尋〜ふ〜り雲津篇〜ハ〜雲津と松坂の  
 同久米村と云建場の事〜今中村を飛を  
 か〜云建場葉を〜向い〜ふ取〜家  
 断後〜あ跡を畑と成居きり〜は狭き勢別

盤責

一〇四十六



うゝハ今よゝゝゝの傳え誰あぬそのとけき  
事たるもどと早少一年経一幸ゆかき色り  
ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
寫籠と果ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
て度ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
實ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
一面ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
江戸其版町ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
と云者ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
云ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根

盛責

八四十七

懐美と必支揚りゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
あゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
有ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
家の棟ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
あゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
其雲の集りゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
予に昔ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
鬱念と晴さんゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
とと通りの雲と成ゝゝゝの根ゝゝゝの根  
見ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根ゝゝゝの根

相云故形ハ面白く作りあふそのの思ひく心  
 の見色も人多く是れは雲の集ふ形ちの  
 通り病者も形く若し事を見く致  
 舞妓の相言も能作りきる事と身入る也  
 用い云おつる甚あまの首その之喜保の  
 花と蝶の色一が或時茶会く四六人集り  
 打柄必お出く行きと着くと元れ終本氏ハ  
 跡の外おちりくは云と悪あ著と元兼く  
 主人り向ひ着は及物り百合の根おぐハ草  
 やく同く主人と兼く蝶ハ存せし事  
 の色ハ主根の品ハ曾く形く扶扱り及ひ

螢責

一四十八

けかが一燈のゆり橋の控扱り百合の花と蝶  
 書きふ有る人々驚く早速其橋と引を  
 くるは速り扱く成り一耳震と云は手に  
 見えたり又云能別及の書原り種は行某と云  
 者の扇席の成事と回書り委及書記有  
 又河波の徳鳴り糸子がや蝶の舞ひく甚ど  
 恐る者有或時餘人歌色り主人ハ若子とあ  
 付たりありありの目首りありく重衣大の  
 腹より肉膚出く之を雅後せし事有と右  
 藩の入りり水り吹笛色く連或人の活せし  
 節の百合と回く類く予が志ある人よと毛虫  
 ぎくひ有く若天井のぐに一足くも節り

居の席へ入るをぞめくもむも〜〜〜暗り志を  
 此行成酒宴遊具の面白く席う〜〜居るえ  
 兼ふこの事之王権親友朋友り、まぶ〜ひ成  
 挙〜ねり、遠〜どかの指生平太所が劉強  
 う〜山本五郎を、〜〜魔王の類の大怪り  
 出倉〜少〜心たもま〜〜と妖怪の方  
 生得嫌ひ成、眩別と出〜〜さか、〜〜  
 魂と〜ゆふ、〜〜成り〜の事、〜〜指生怪徒  
 海り〜色の、〜〜弦巻、〜〜と者〜〜の、〜〜事  
 有り予、童蒙の時政人の、〜〜、〜〜  
 児童者〜〜常〜、〜〜散お〜〜、〜〜に、〜〜  
 持身ふ〜〜へ、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜

醫責

武時強情、善り〜〜、餘りに〜〜と〜〜入〜〜  
 獲〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜  
 始ハ、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜  
 明〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜  
 ところ、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜  
 妙〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜  
 事、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜  
 忍る、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜  
 藤原の輔忠の朝臣大和守〜〜、〜〜、〜〜  
 福〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜  
 是ハ、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜  
 事なり、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜、〜〜

勞ゆめこも手て下くださ事こと行ゆりり見み童どうかどと愛あいするるとて  
 子そのこ見みの用こまりり嬌せう入い事ことと行ゆりり其その有あるる奴やつと與あら  
 樂たのむむ人ら有ら味あじむむと事こと々々雲た々々小せう見みと愛あいままか  
 とと花はなと持もつつとと色いろと角かくるるべべとと差さ出いままと小せう  
 見みるる貴たか入い事ことと心こころ終つくく收うびびくく多たと出いせせたた  
 ちちととと捨するる其ま似にと行ゆりりここの後のちのの  
 方うへへ遠とほとと小せう見みハハちちががりり後のちのの方うとと存ぞんるるこ  
 竊ひそりり若まへへ持もつつりり又また花はなと角かくるるべべと差さ出いまま  
 ゆゆ急せう小せう見みハハ又また收うびびくく多たととああままとと又また先まのの如ごとくく捨す  
 其ま似にとと一い竹たけ皮かわと回あらら事ことととと懸かハハそのの  
 見みと愛あいままとと連つせせととと行ゆりり見みハハ竹たけ皮かわととだだま  
 ささままととと後のちりりハハ涙なみだ出いままとと故ゆええとと時ときりり漸やくくとと樂あくく入い

昔大藏乃大吏藤原乃清原と  
 りの者動く猫と恐まかり世の人  
 猫恐ま乃大吏とぞ名付たり此清原  
 山城大和伊賀三箇國は田と多く作  
 後量と徳人少く有よ藤原乃輔志朝臣  
 大和乃身少く河の侍りて國乃  
 官物と僅後を多とぞ老や南  
 りて清原出さざるまて灰毛  
 現なる猫乃大い形のふみ  
 まぐそ形へ入ると清原  
 目より大い形の涙と落して  
 迷ふとみつる猫清原が神とぞ

一雅筆



ま乃南彼西の南とをり初ふ  
 清原をなせりり  
 堪驚る故先猫と  
 退りてまバム  
 乃猫鳴合音  
 耳と書くと  
 清原行ふ  
 よ成ゆゑ  
 やぐりて産  
 りあ大和の國  
 空此の形の家  
 りの稲米の下書と書せし官物と  
 出させし奉令者物語りみあり





面々せうにと小児せうにのぐと痛うん忘わすの者もののハ後あと々々  
 花はなと花はな々々その人ひとへお付うつつけ々々見み向むかとせせぎぎかか思し々々  
 者もののめりいっせん一寸いっせんの虫むし々々むしトの精たま神まじ者ものの  
 張は々々は事こと々々は元もと々々はかかりり々々は圍こまりせ  
 腹はら々々はかか々々はハ者ものるる事こと々々は又また右みぎのの思し花はなと  
 持も店てんのの時とき々々はとと思しとと覺あ々々は避と其その花はなとと呉くれ々々は  
 々々は思しののいいやや々々はとと樂たの々々は々々は母はは愛あい々々は  
 々々はハ思しのの持も店てんかか花はなとと元もと々々はとと々々は何なん  
 々々はもも々々は無な々々は風ふう情じやうとと々々は思しのの圍こまりり面めん々々は  
 々々はかかとと思し々々はかかとと有あ々々は右みぎのの花はなとと持も店てんのの小せう思し々々は  
 々々は花はなとと呉くれ々々は乞こ々々はハ思し々々は小せう思しハハたいたいとと々々は捨す々々は  
 々々は真ま似にとと々々は己おののの後うしろのの方かたとと々々は隠かく々々は々々は

小見たりと大人と歌さく見せるハ先よは方の  
 歌さく見せさく故歌く事と覚く又先ふも  
 歌くのりは是未ハ能人の事なる事なりとて  
 どの女つとさう小見たり嘘と教るの根中  
 收むと事さく次や来るなり侍伏とて  
 不意に初らもちのさ事ハ神のけく世ま  
 事と歌解大人よ對くと先人の嫌事と  
 困ら事くりたつる事と強く智く困ら  
 事くもむら云バ違事品よ事べりけく武士た  
 義りたるとハ一命り殺く見道く事  
 者べり心と云ハハ心と  
 音夢後と形と事

士口筆

一ノ五十二

東都言はる老海屋市兵浦と云瀬戸物屋有る名古屋  
 出生りく予竹馬のの巻たりと智覚く文字と  
 少く有く世藝板打と一通りハ行取り居て  
 出のりる面白き男は者な私ハ不思議事さ  
 事成類の事ハ多ハる遠や或ハ嘘くく先ハ  
 理外の秀様と云事ハ少きもの故く是ハ實なる  
 事くくは成事と人ハ義法くく實と事  
 事くつらと性くく口は面白き山不思成と事ハ  
 事く有る者ハ存事ハはくく人なりハ唯願心  
 多くく大幹の事ハ心伏なりと事ハはくく事ハ  
 事ハ事ハ眼前り念息のゆめ事と見徳り  
 元平三年とい前天保の初とて事ハ決地例に

紀伊國を久兵衛とて紀伊の國の船問屋屋敷に或時は久兵衛の  
 中にハ船候妙成夢と見申すの當土の山より霧を繩一筋  
 引張有て霧が當の札一枚控へ来りて其繩へ引懸  
 たり是ハ妙成事と思ひて其れと見申すを何行書と  
 怪り讀覺て入り書成夢と見申すものうかへ咄は  
 夢の咄ハ其夜は居合せと安座中いへども其夢  
 久妻成事ハ故候ハ仕り兼いへども先夢の咄を  
 右の通りには座候御入り其席は居合うか夫事と  
 紀伊の國の船問屋長崎屋の代の者けをまゝと安  
 其是ハ此を色形と書光たり急をさき番の札と其  
 ら是より其物め々事とて久兵衛ハ寛慶より引  
 其の板成事ハ一向好まざるものゝ久ハ夢あり



踏ぐ幸よ恨ごとく云々心ゆくゆ念かり代の者たゆら  
 玉香と我あり下さるる者うと云々に行をせせるを  
 とたつほくくを母く求めらまうく言へぬおは代  
 の者ハむく高好うく常くあり付風に付くを  
 是ぞ吉兆なりと云々なうく云々高れと穿鑿し  
 求む程の事なきハ是ぞ天より我亦は換りる福と  
 くとく暇ふ事浪りゆく垂りたるれと云々つと心  
 々まごとも何か吉香のれう高れの賣捌可と救世  
 なるまう己まき人うくハ一時は穿鑿出来ぬゆ念  
 己とあるとく高の好なり友とあ人うくひと人しては  
 中端くまごく悉く母の索まごともかの夢の香附の  
 札ハたう尋とびく冷方うさう夢と一番遠ひの

札と見付を造る故せめて河の札ありとも買丸なり  
 一々湖を札と買丸く島興行と侍居り彼夢の  
 ろご中一たん百あり南り札と成る故代の者乃求め  
 一札と一番遠い事バ袖札と成る怪つみあたる丸  
 中の是ハ現立私存居り事うく如何と合点の  
 形ぬ事行ぐ事の色ぬとの不思議とる色有との  
 うく山登りく市兵清治りより争ひよ昔栗田の  
 大信立御公あご六位の時鞍馬寺は籠り強ひたり  
 御帳の用より笈と強ふと要又見あひに事笈よ在信  
 従二位在御との色たりたり後其要の如く大信と成  
 ろひ一と中事有り又或書り右大信歳ハ八十二と承  
 強く後意の如く昇進くく八十三の時右大信よ進  
 一ノ五十五

古夢

あゆ急彼寺よ清く性有右大信八十二の由承現と家と  
 之とも今既りけの如くと念トあふく尻沙門天亦  
 夢乃中に承あふハ官ハ右大信うく有に年来勤  
 の四り信く右大信よ五より歳ハ八十七と承あふて  
 何の歳り竟逝りりと云事有是亦ハ正安鞍馬の  
 支門天の承あふ靈夢あることけ之兵清の夢ハ如何  
 たる神のせめあ夢よや市兵清の不審思ふと理り  
 母あ實り一夢事とり一巻り

想山著岡昇集巻の巻 終